

関西大学 F D フォーラム

Vol.1

特集：「学生による授業評価アンケート」報告



編集・発行
関西大学 全学共通教育推進機構
F D 部門委員会・授業評価部門委員会
発行日
2001年6月22日

〒564-8680 大阪府吹田市山手町3-3-35
Tel 06-6368-1121 Fax 06-6368-0083
URL <http://www.kansai-u.ac.jp>

世界水準を見据えた教育内容と方法の追求を

関西大学長 永田 眞三郎



大学の講義は、これまで、カリキュラムの枠のなかで、個々の教員がそれまでに蓄積してきた専門的な識見と経験によって企画され実施されてきました。講義の内容や方法を改善するにしても、いわば「手応え」という職人的な感覚に基づく教員個々人の自省に頼ることが多かったといえます。学生が講義の内容や授業方法を評価し、それに基づいて教員がその改善を行う。この「授業評価」は、教員による企画・実施・改善という大学の講義のライフサイクルに「検証」という一つのプロセスを加える試みです。「授業評価」は、これまでに、個々の教員によってあるいは個々の学部・外国語教育研究機構において、それぞれのやり方で行われてきましたが、今回は、本学で初めて、すべての講義科目と外国語科目を対象に、全学共通のフォーミュラによって、一斉に実施されたものです。

2000年4月、「全学共通教育推進機構」が設置され、そのなかの一つの委員会として授業評価部門委員会が設けられました。そこでは、発足以来、FD(ファカルティ・ディベロップメント)部門委員会と連携しながら、学生の質的向上を図るための教育内容や教育方法の改善の問題に組織的・専門的に意欲的に取り組んできました。今回の「授業評価」は、その最初の企画です。

今回の「授業評価」の実施実数は、全部で3,038クラスにのぼり、延べ109,789名の学生から回答を得ました。3月には、そのすべての授業担当者にそれぞれの集計結果が伝えられています。このニューズレター『関西大学FDフォーラム』は、今回の「授業評価」の結果を組織的・専門的に整理分析していくための第一歩としての速報です。

「授業評価」に関しては、なお種々の議論がありますが、この結果を授業内容と方法の改善のためにどのように生かしていくのか、そのためにはさまざまなチャンネルが考えられます。いずれにしても、そのシステムを工

夫することが必要な段階にきています。7月4日には、FD・授業評価部門委員会によって、「授業評価の現状と今後の課題」をテーマとする「FDフォーラム」の開催が準備されています。

授業内容や授業方法の改善については、FD部門委員会を中心にして、いくつかの企画が進められています。本年4月には、「新任専任教員へのオリエンテーション」が実施され、本学においても、組織的な取り組みとしての「FD活動」が本格的に始動しました。また、学生諸君の授業に対する関心を高め知的好奇心を刺激する、そんな授業のあり方を教員に提供するために、モデル授業のビデオ作成が進められています。

いまや、情報化の急速な進展にともない地球が小さな村(グローバル・ヴィレッジ)になっている現在、「社会に通用する」すなわち「世界に通用する」人材の育成をめざすという視点が必要となっています。「授業評価」と「FD活動」は、両者があいまって、まず、本学の教育の質について世界水準を見据えた基盤整備を行い、さらに、その基盤を堅固なものにする仕掛けとして、大きな責務を担っているといえます。

活力ある大学をもとめて

全学共通教育推進機構長(副学長〔共通教育担当〕)
河田 悌一

かつてオーストラリアのいくつかの有名な大学を、見学して廻ったことがある。オーストラリアの大学におけるアジア研究と外国語教育の状況を調査するためであった。

そして大いに驚いた。それらの大学が、美しいキャンパスと立派な建物をもつだけでなく、すぐれた日本研究と日本語教育をおこなっていたからである。

たとえばそれは、関西大学に毎年2月、姉妹校のオーストラリア国立大学(ANU)からやってきて、1カ月間の「日本語・日本文化研修セミナー」の授業をうける20名あまりの学生たちをみれば、明らかだろう。彼らそして彼女たちは、政治学、経済学、文学、社会学など様々な専門(Major)を一方でもちながら、日本にたいする知識と日本語も、すでにかかなりの高い水準にまで到達しているのである。その会話、読解、作文力は、以後1年間、関大をはじめとする日本各地の大学での勉学に、十分に耐えられるものとなっているのだ。

それは、なぜ可能なのか。その理由のひとつは、彼らがきわめて短期間に数多くの教材を使ってシステムティックに日本語を習得させられてきたからだ、といえよう。日本語Ⅰでは漢字450字、Ⅱでは750字、Ⅲでは1,050字の漢字をマスターする、というように……。

その上で、担当教員は各学生について、その到達度を見事にチェックしているのである。

それだけではない。逆に、教える側の教員は、きちんと時間通りに教科書、各種の教材、機器類をうまく使いこなしながら授業をしてきたか否か——が「Student Evaluation」として、受講する学生たちに質問される。つまり、学生たちが教員一人ひとりの教え方が適当なものであったか、どうかということを相互にチェックしながら、大学での教育がなされているのだ。

学生たちの日本語能力が高い水準にあることも、ある意味で当然なのである。

20世紀最後の年にあたる昨年11月、「学の実化」をモ

アンケート結果

①調査の趣旨

大学教育の現状を正しく認識するためには、学生が大学の授業にどのような態度で臨み、どの程度内容を理解し満足感を得ているのか、実態を知ることが必要である。関西大学では、学生からの生の声を真摯にうけとめ、21世紀にむけた大学教育の望ましいあり方を探る目的で、今回、全学的な理解と協力のもとにアンケート調査を実施した。

ただし今年度が最初であり試行的なため、実施については教員個人の判断に委ねた。

②アンケート実施方法

- (1) 無記名の質問紙法(アンケート)による。
- (2) 学部(機構)事務室または講師(教員)控室で、授業担当者が授業前にアンケート用紙を受けとる。
- (3) 授業担当者が、アンケート用紙を出席した学生に配布し、回収する。
- (4) 回収したアンケート用紙は、授業担当者が学部(機構)事務室または講師(教員)控室に提出する。
- (5) 各学部、外国語教育研究機構から回収したアンケート用紙は全学共通教育推進機構事務室で集計にたずさわる。
- (6) 集計結果は科目毎に一覧表にまとめ、自由記述部分とともに授業担当者それぞれにフィードバックする。

③アンケート実施期間

平成12年11月20日(月)～12月2日(土)

④調査対象

- (1) 平成12年度第1部・第2部の開講科目のうちとは複数担任科目を除く教養科目と専門教育科
おこなう。
- (2) 各学部と外国語教育研究機構の専任教員を対
も対象とする。学部、外国語教育研究機構の意
ができる。また専任教員1名に対し、1科目を担
がれる。
- (3) 非常勤講師については、各学部、外国語教育研
がれる。
- (4) 学部に関する個別の質問は、別途各学部が質問

⑤集計方法

- (1) 科目毎の単純集計およびクロス集計をおこな
おこなう。
- (2) 自由記述欄については、授業担当者に提供す

⑥質問項目

下図の単純集計、グラフ中央部を参照のこと

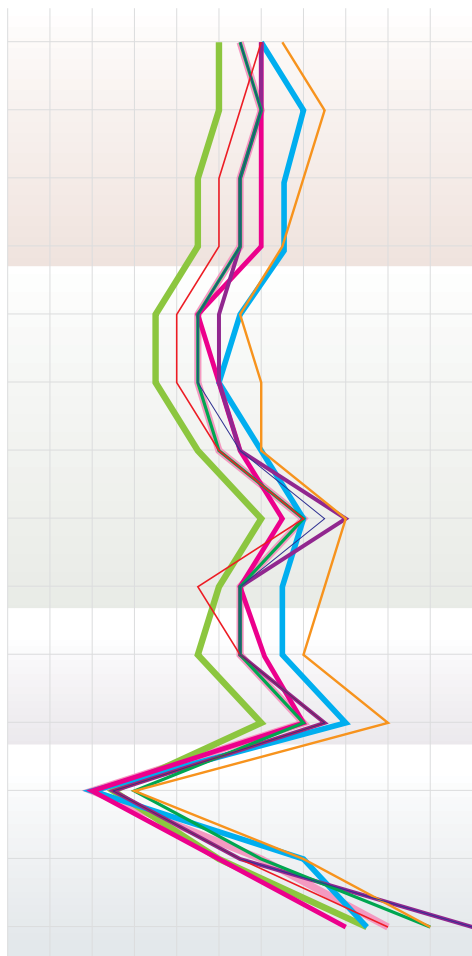
⑦回答方法

各質問項目に関して、次の5段階で評価し、該当
【⑤強く思う ④そう思う ③どちらとも思

⑨集計方法による報告

○全体

4.6 4.4 4.2 4.0 3.8 3.6 3.4 3.2 3.0 2.8 2.6 2.4



質問項目の単純集計(講義科目)

(5段階評価の平均値)

I. 講義内容

1 講義内容は、講義要項・授業計画等で期待していた
とりの内容でしたか。

2 講義内容は理解できましたか。

3 抽象的な内容について、わかりやすくする工夫がな
されていたか。

4 専門的概念や用語がわかりやすく説明されていた
と思いますか。

II. 教授方法

5 話し方が明瞭で、講義内容がよく聞き取れましたか。

6 学生の理解を深めようとの熱意・努力が感じられま
したか。

7 教科書・配布資料の利用は適切でしたか。(該当しない
場合は回答欄に⑥を記入してください。)

8 黒板(白板)の使い方は適切でしたか。(該当しない
場合は回答欄に⑥を記入してください。)

9 OHP、ビデオ、パソコン等機器の使い方は適切でし
たか。(該当しない場合は回答欄に⑥を記入してください。)

III. 講義の成果

10 全体としてこの講義を受講して満足しましたか。

11 この講義から触発され、関連する課題をさらに深く
勉強したいと思いましたか。

IV. 受講態度

12 あなたはこの講義によく出席しましたか。

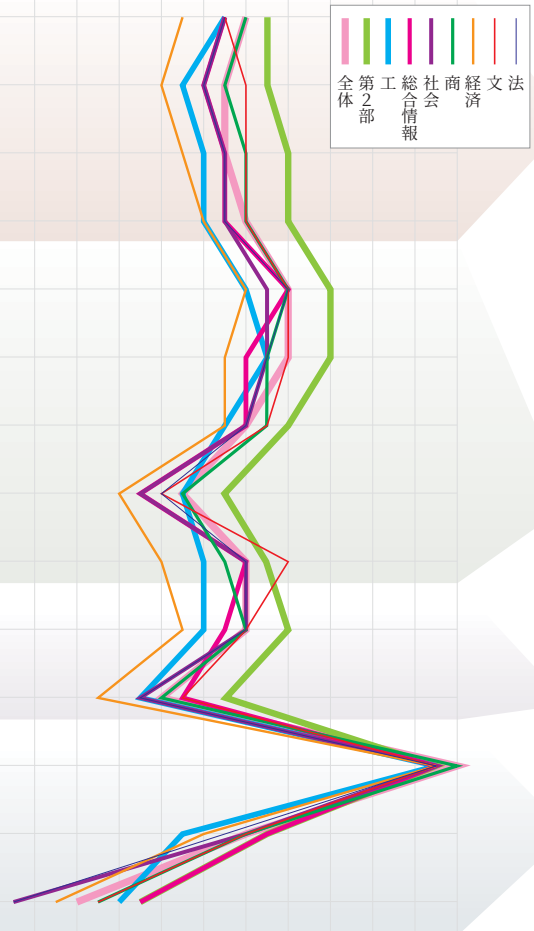
13 あなたは受講前にこの講義に興味をもっていましたか。

14 あなたは予習・復習するなど、この講義に意欲的に
取り組みましたか。

○高出席率者(※)対象

(※「高出席率者」とは質問項目12において、④・⑤の評価をした者の数値)

2.4 2.6 2.8 3.0 3.2 3.4 3.6 3.8 4.0 4.2 4.4 4.6



FD部門・授業評価部門委員会委員(社会学部) 熊野 建

今回のアンケート結果は速報的な性格にとどまり、詳細な分析を報告するものではないことを予めお断りしておきたい。学部毎の講義科目について、単純集計した平均値(上の図参照)を高いと見るか、低いと見るかは意見のわかれるところだろう。

学生たちが講義に積極的に臨んでいるとグラフからは見てとれるが、履修者数と回答者数の乖離は歴然としているのも事実である。講義科目の場合、必修と選択を含めた統計であり、アンケートに回答しなかった学生の沈黙を、たとえ分析不可能だとしても、いかに受けとめればよいのだろうか。

救いといえば、出席良好な学生ほど、また年次が高くなるほど(6ページの問1・問11の学年別集計参照)、講義への満足度が高くなる傾向が認められる。ここから講義に対する学生の評価は、おおむね肯定的である、と見て良いだろう。ただし、この結果に安んずるのではなく、学生の評価が高いうちに積極的に授業改善の方策を探るべきである、と考える。また授業評価アンケートも今後、調査の数を重ねて精度を高め、慎重に比較検討する素地をつくる必要があるだろう。

ットーとするわが関西大学においても、「学生による授業評価アンケート」が、諸先生方の努力と事務の方々の協力、さらにはFD・授業評価部門委員長、水越敏行教授の尽力によって、実施された。

これをひとつの契機として、研究のみに没頭することなく、その研究の成果を明快なわかりやすい言葉で学生たちへの教育に生かす——という研究と教育の能

力をあわせもつことの必要性が、教員各位によって理解されることが期待される。

と同時に、21世紀を生きてゆくにふさわしい学力と知識と識見を三位一体にあわせもつ、活力ある学生諸君が輩出して欲しい、と願っているのは、私だけではないだろう。

大学での授業評価はどうあるべきか

FD部門・授業評価部門委員長 水越 敏行

1. Plan~Do~See という概念が、広く普及している。「計画—実施—評価」と訳されている。計画を立て、それを実施に移し、評価して、その結果から計画の見直し、実施の修正につなげていくのである。私がこの用語に初めて接したのは、国際協力事業団(JICA)で、スリランカ、タイ国、そしてケニアなどで、新しい援助計画とその評価、計画や実施プランの見直しなどに参加したときであった。むしろこちらの方が本流であって、教育の研究会などで「授業評価から授業改善へ」というもどろ道の提唱は、その応用編とでもいうべきであろうか。

2. 事業計画ではごく当たり前のことである。しかしながら教育の世界では、そんなにすんなりとは通用しない。教師という特定個人の評価につながる。あるいはそんなに綿密な計画を立てて臨んでいない。実施そのものが厳密に統制されず、不確定要素が多すぎる。生徒や学生の評価が、どこまで信頼できるのか。同じ講義や実習でも、意欲に燃えた生徒や学生と、よそ事に精力の大半を費やしている者たちとでは、成果がまるで違う。当然彼らの「戻りの情報」にも格差がついてくる。こうしたことは確かに言えるだろう。

それでも義務教育諸学校では、年間指導計画、単元構成、メディアサポート体制などは、毎年評価を積み重ねていくようになってきた。計画を授業で実施してみる。それを児童生徒からの評価、教師の同僚や先輩からの他者評価などに掛けて、修正や変更をしてきている。ところが大学では、こうした例は皆無に近い。年度末に1回、学生による授業評価を実施しただけでも「授業改善学生の声生かす」～大東文化大が全学規模で評価～と言うような記事が、日本経済新聞(平成13年4月7日)に載るといのが、現実なのである。

3. しかしながら大学にもようやく浮世の風が吹き込むようになっては来た。少子化にともなう大学間の格差拡大、学生の学力低下問題、学生のニーズの多様化、遠隔共同学習などで「衛星から講義や演習が降ってくる」高度情報化の進展、などの諸問題や外圧が絡んで、大学そのものが、浮世離れた存在では居れなくなって来た。知の総合化や複合化が急速に進み、一人の大学の教員が、その全てを把握し、体系的に教えることは、もはや不可能になって来た。

「トーク・アンド・チョーク」と揶揄される一斉画一の講義、専門書を時間を掛けて読み解く演習、技術革新の後追いしか出来ない実習のあり方、これらを見直して、授業の内容、方法、施設設備、教員組織などを、どう変えていくかを真剣に検討しないと、大学は生き残れない時代である。こういう危機意識は、国公立・私立の大学人全てに、程度の差はあっても共有されては来た。

4. 問題はどこからどう手をつけるかの具体的方略であろう。授業評価から授業改善へ、そしてFDへというのは、その具体策の一つに過ぎない。もっと別の有効な手立てがあるかもしれないのだが、関西大学では全学的にこの部門委員会を組織して、平成12年度から具体的な活動を始めたのである。まず授業評価から入っていこう。それも講義に限定してみよう。既に以前から実施して来た工学部、経済学部、総合情報学部などの授業評価をモデルにして、試案を作成してきた。チェックリストと自由記述とを併用したり、学部によって実習を含めたり、質問項目を違えたり、いろいろと工夫を加えて来た。ようやく全学共通教育推進機構委員会の承認を得て、平成12年11月末から12月にかけて、第一回の授業評価を実施することが出来た。専任だけでなく非常勤の教員の協力も得て、実施科目(クラス)は約3000、学生数は延べ約11万人、実施率は約90%という結果になった。これを詳しく分析・検討したのが、この報告書の骨子になっている。

5. この報告書の発刊と同時並行して、委員会は次の計画の実施に移っている。

- (1) この前期(春学期)にも、引き続いて授業評価を実施する。7学部と外国語教育研究機構との調査項目を同じにする。また前回の結果を踏まえて、チェックリスト項目を、特定学部から全学に移行させるとか、自由記述欄を別紙にして、拡充するなどの変更もする。
- (2) この7月には、授業評価では先進的な試行を重ねてきている佛教大学から、西之園教授を招いて、本学との比較検討の研究会を持つ予定である。「評価の技術的な検討だけでなく、戻りの情報をどう生かせるか」に踏み込んで。
- (3) 新しい講義、演習、実習などのモデルを、各学部の中から選んで、ビデオテープに収録し、編集する。担当した教員や、受講した学生の意見も収めて、そこから共通化・一般化できるものを取り出していく。この前期(春学期)から始めて、来年度までにいくつかのモデルを映像化していく。
- (4) この授業の映像記録で、先導的な業績を上げている京都大学から、担当の教授らを本学に招いて、記録の取り方、生かし方などで、後期(秋学期)には研究会をもつことも予定している。

以上は、小さな試行ではあるが、一つずつ礎石を積んでいく積みりである。全学の教職員のご協力をお願いしながら。

⑧回収結果

(注:学生数は延べ人数である)

	全 体		講 義		外 国 語	
	科 目 (ク ラ ス)	学 生	科 目 (ク ラ ス)	学 生	科 目 (ク ラ ス)	学 生
実 施 対 象	3,378	276,338	1,805	219,726	1,573	56,612
実施実数・ 回 答 者 数	3,038	109,789	1,522	68,892	1,516	40,897
実 施 率 ・ 回 答 率 (%)	89.93%	39.73%	84.32%	31.35%	96.38%	72.24%

講義科目と外国語科目を対象とする。講義科目
科目である。合併科目については先行する学部で

対象とする。ただし外国語については非常勤講師
向によっては、上記以外の科目も対象にすること
授業評価アンケートの対象とすることができる。
研究機構の意向により、実施することができる。
問項目を作成することができる。

う。
る。

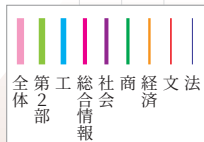
する番号を〈回答欄〉に記入。
答えない ②そう思わない ①全くそう思わない】

質問項目の単純集計(外国語科目)

(5段階評価の平均値)

○全体

4.6 4.4 4.2 4.0 3.8 3.6 3.4 3.2 3.0



I. 授業内容

1 授業内容は、講義要項・授業計画等で期待していたとおりの内容でしたか。

2 授業中の活動や授業外の課題の内容は、外国語の力を向上させるうえで効果的でしたか。

3 授業の進む速度は、外国語の力を伸ばすうえで適当でしたか。

4 授業の中で行われた活動の難易度は、外国語の力を伸ばすうえで適当でしたか。

5 授業で要求された授業外の課題の量は、外国語の力を伸ばすうえで適当でしたか。

II. 教授方法

6 話し方が明瞭で、授業内容がよく聞き取れましたか。

7 学生の積極的参加を促すものであったと感じましたか。

8 わかりやすくするための工夫、努力が感じられましたか。

9 授業で用いられた教材は、内容的に興味の持てるものでしたか。

10 授業では、外国語を読む、あるいは聴く機会が十分設定されていましたか。

11 授業では、外国語を話す、あるいは書く機会が十分設定されていましたか。

12 授業は、定刻に始まり、定刻に終わりましたか。

13 授業の人数は、学習している外国語の力を伸ばすうえで適切でしたか。

14 テープレコーダー、ビデオ、OHP等機器の使い方は適切でしたか。(該当しない場合は回答欄に⑥を記入してください。)

III. 授業による成果

15 授業は外国語の力を伸ばすうえで役にたつと感じていますか。

16 授業で学習した外国語やその背景文化に興味を持つようになりましたか。

IV. 受講態度

17 あなたはこの授業によく出席しましたか。

18 あなたは授業に意欲的に取り組みましたか。

V. 学習評価

19 この授業では自分の平常の努力が、正当に評価されている、あるいはされるだろうと感じましたか。

○高出席率者(※)対象

(※「高出席率者」とは質問項目17において、④・⑤の評価をした者の数値)

3.0 3.2 3.4 3.6 3.8 4.0 4.2 4.4 4.6

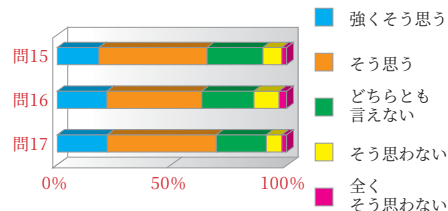


FD部門・授業評価部門委員会委員(外国語教育研究機構) 静 哲人

「よく出席した」学生だけを取り出した場合に、全体の場合と平均値が異なったのは、問17自体を除くと、問10(読む聴く機会が十分設定されていたか)、問11(話す書く機会が十分設定されていたか)、問13(人数が適切だったか)、問14(機器の使い方は適切だったか)、問18(授業に意欲的に取り組んだか)、そして問19(正当に評価されると思うか)、であった。そのすべてにおいて「よく出席した」学生の数値のほうが高い。外国語科目の授業においては一般に出席が重視されており、ほとんどの学生がよく出席していると思うが、それでも出席状況とこれらの質問への回答が連動しているのは興味深い。また、問10と問11の平均値を比べると問10のほうが高い。インプットの機会のほうがアウトプットの機会よりも多い傾向にある、という予想通りの結果である。まずは題材を深く読みこむことが必要なのは言うまでもないが、今後ますます外国語による(口頭および書面での)正確な発信能力が重要となることも間違いない。よって、問10と問11の平均値をいかに接近させるかが、今後の課題のひとつであろう。その意味も含めて外国語教育研究機構では現在カリキュラム改革を検討中である。

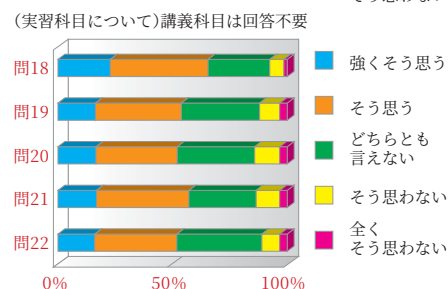
文学部独自の質問

- 15この講義の受講者数は、適当でしたか。
- 16この講義は私語もなく、学習環境として適切でしたか。
- 17教室の規模および設備は、この講義にふさわしいものでしたか。



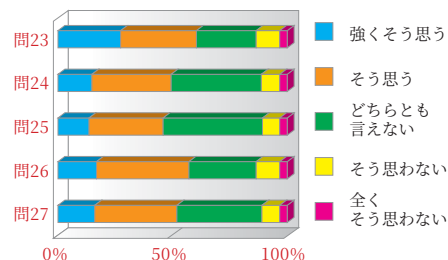
総合情報学部独自の質問

- 18実習の設備・機器は授業の内容を理解するのに役立ちましたか。
- 19実習の設備・機器は扱いやすかったですか。
- 20実習の設備・機器に満足しましたか。
- 21TAやSAの補助が実習の理解に役立ちましたか。
- 22授業時間外での実習機材の利用に満足していますか。



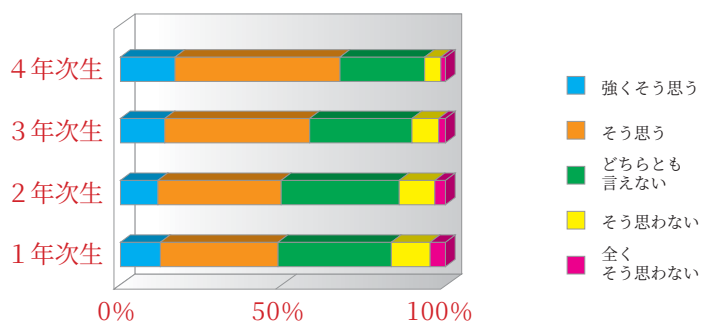
工学部独自の質問

- 23板書、OHP等の内容を書きとめるように努めるなど、よく集中して講義をうけましたか。
- 24宿題・演習は、講義内容を理解するうえで効果的でしたか。
- 25担任者は、学生からの質問を奨励し、その質問に明確に答えましたか。
- 26教室の広さ、黒板の大きさは適切でしたか。
- 27教室の設備(マイク、OHP、スライド、コンピュータ等)は十分でしたか。

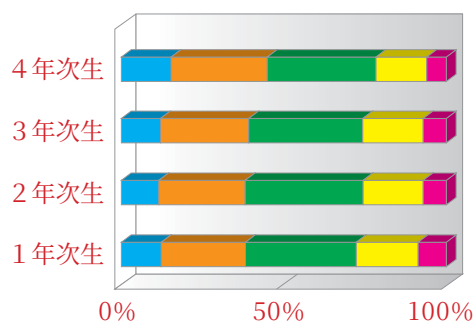


学年別単純集計(全学部・講義科目)

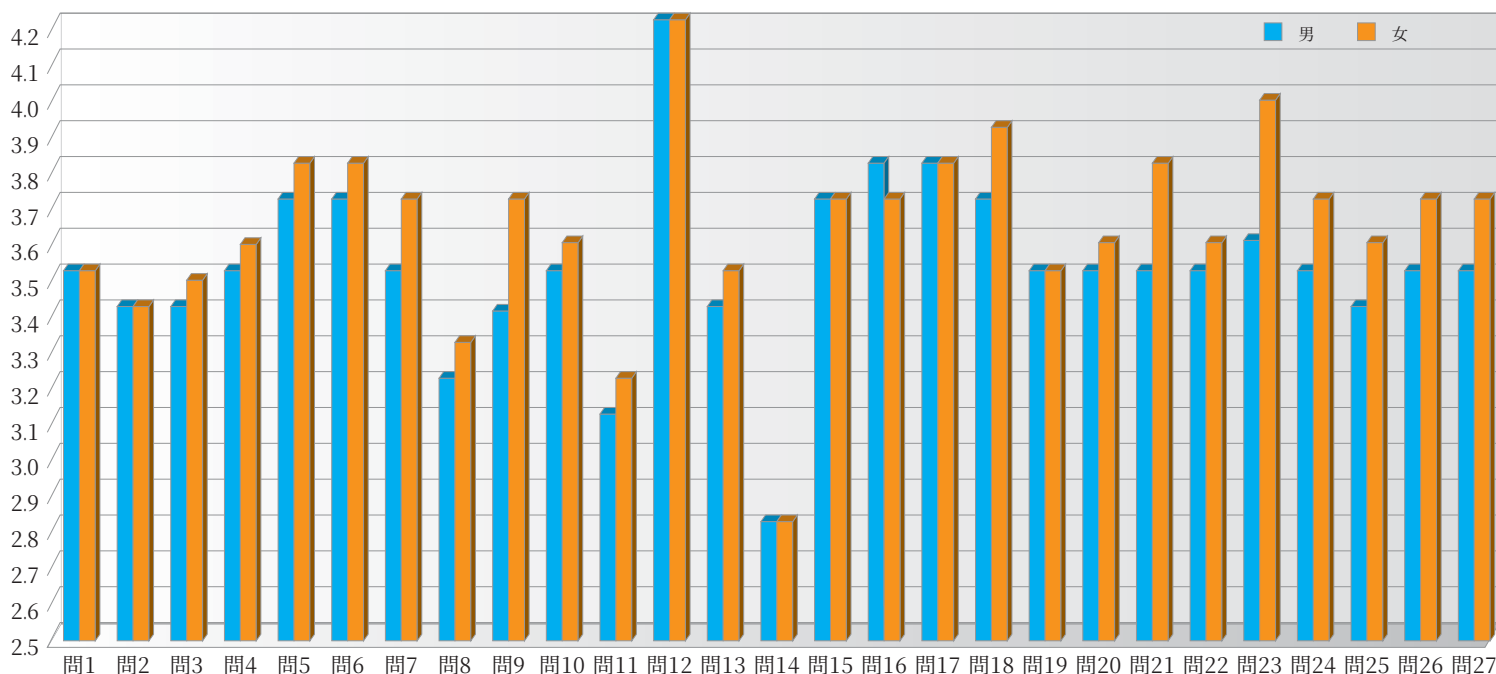
〈問1〉 講義内容は、講義要項・授業計画等で期待していた
とおりの内容でしたか



〈問11〉 この講義から触発され、関連する課題を
さらに深く勉強したいと思いましたか



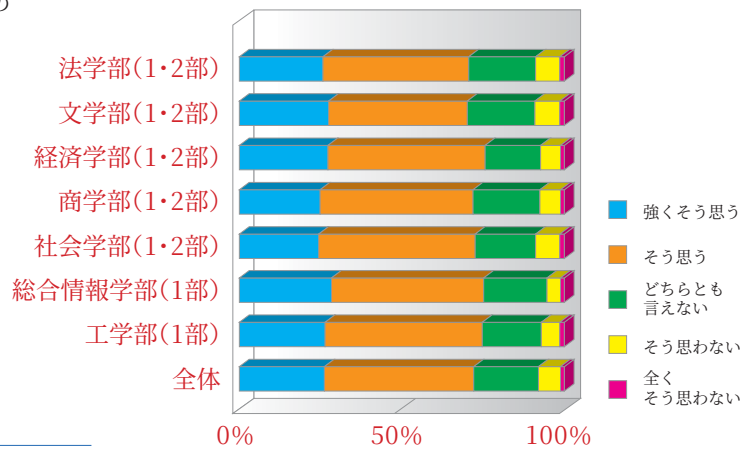
男女別単純集計(全学部・講義科目)



質問項目のクロス集計(学部別・講義科目)

「問13」で④・⑤の評価(受講前にこの講義に興味ありを選択)をした学生の「問10(講義受講の満足度)」の結果

全体としてこの講義を受講して満足しましたか



素直な表現から魅力ある講義を生みだしたい

F D部門・授業評価部門委員会委員(文学部) 畠瀬 直子

学生が授業評価をするという初めての試みに委員として参加して、なんだかドキドキした。

アメリカでは昔からやっていて、「私もやってみたい!」と感じたことはあるが、自分がやられるとなるとなんだかドキドキしてくる。第一アメリカ式にやると、人目を気にする文化の中で研究者になった努力型の先生方をノイローゼに追いやる危険性だってある。

委員会が始まるとそんな心配はすぐきえた。誠実・堅実・慎重な委員達の熱心な討論に、関西大学への信頼が深まっていった。すでに実施している工学部での試行錯誤や他大学での取り組みを参考に、アンケート用紙がすこしずつ姿を現していった。やがて思い出されたのは、すばらしい著書のある我が国にとっても大学にとっても貴重な先生なのに、授業

が眠くて困るという笑い話だった。特に文学系統にはそのタイプの研究者がいるはずである。学生から見ると徹の生えたような研究で、アカデミズムの歴史では欠くことのできない研究が集中している。「はたして、先生方は、協力してくださるのだろうか?」

初めての試みは大成功だった。先生方の協力、事務方の労力提供、何回も回答するわずらわしさをいとわなかった学生諸君の協力。本当にほっとして、楽天的な私は、みんなと祝杯をあげたい心境だった。しかし今、初回の体験をどう生かし、どう発展させていくかの議論が始まった。委員の先生方と仕事をしていると、21世紀の関大が大樹として人々にアカデミズムの成果を提供する姿がみえてきて心の内奥に真のやる気がひろがるのを覚える。

授業評価アンケートで考えたこと

前F D部門・授業評価部門委員会委員(工学部) 白岩 正

今回、本学では初めて全学的に学生による授業評価アンケートが実施された。授業科目・内容は学部によって当然異なり、またそのために多少なりとも授業方法も異なるであろう。したがって、学部間で授業に対する学生の意識・取り組み方、さらには学生気質等の差がアンケート結果に現れてくるのではないかと少し期待を抱いていた。しかし、ある程度予想はしていたが、アンケート結果は学部間でほとんど変わらず、そのような学部による差を見出すことができなかった。

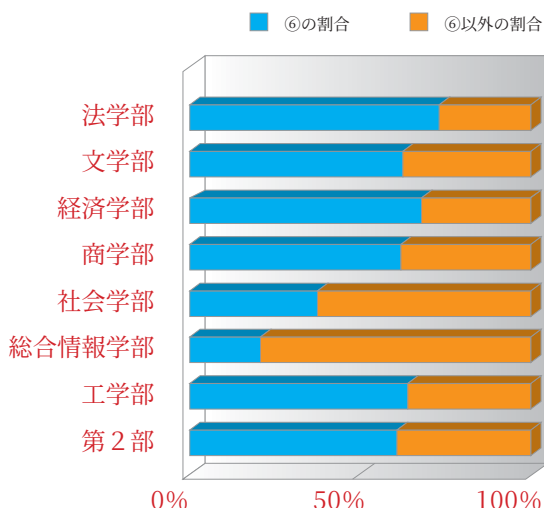
ただ、講義科目アンケートの各学部共通の設問中に、問9「OHP、ビデオ、パソコン等機器の使い方は適切でしたか」がある。その回答 ⑥の「該当せず」は「授業でこれらの機器が使用されなかった」に対応するであろう。総合情報学部では、⑥と回答した学生は21%と低い割合であり、これは総合情報学部での授業の性質上当然であろう。しかし、その他の学部(第2部も含めて)では、社会学部の38%を除いて、61~73%の比較的高い割合であった。

合であった。

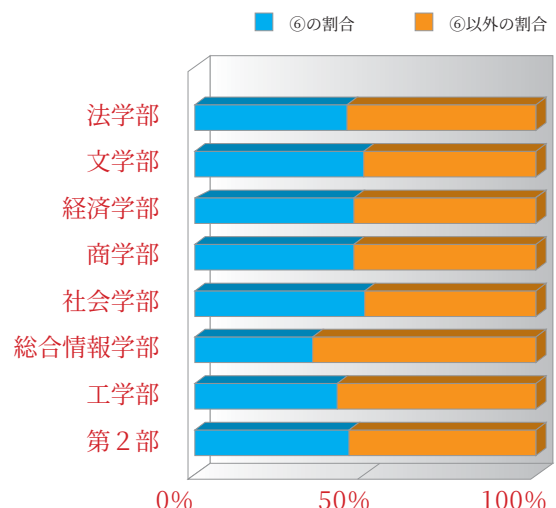
なお、外国語科目のアンケートでは、問14「テープレコーダー、ビデオ、OHP等機器の使い方は適切でしたか」がこれに対応し、⑥と回答した学生の割合は、総合情報学部では35%、その他の学部では41~50%であり、講義科目よりも低い傾向を示している。講義科目に関して、人によって感じ方も異なるので、以上の結果だけで結論付けるべきではないかもしれないが、この結果は、私の授業も含めて多くの授業でこれらの機器が使用されていないことを示しているように思われる。

しかし、好むと好まざるとに拘わらず、今や IT 時代であり、また現代の学生は視覚的に物事を理解する世代と云われている。科目によってはこれらの機器を取り入れ難い授業もあるであろう。しかし、学生が授業内容をよりよく理解できるなら、私の頭ももっと IT 革命を進め、これらの機器を積極的に授業に取り入れるべきか、と大いに考えさせられた。

〔参考〕問9における⑥回答者の割合



〔参考〕問14における⑥回答者の割合



活動記録

2000. 4. 6	平成12年度	第1回FD部門委員会・授業評価部門委員会	2001.1.23	平成12年度	第13回FD部門委員会・授業評価部門委員会
5.17	平成12年度	第2回FD部門委員会・授業評価部門委員会	2.21	平成12年度	第14回FD部門委員会・授業評価部門委員会
5.31	平成12年度	第3回FD部門委員会・授業評価部門委員会	3. 6	平成12年度	第15回FD部門委員会・授業評価部門委員会
6.13	平成12年度	第4回FD部門委員会・授業評価部門委員会	3.27	平成12年度	第16回FD部門委員会・授業評価部門委員会
7. 4	平成12年度	第5回FD部門委員会・授業評価部門委員会	4. 1	平成13年度	新任教員オリエンテーション
7.13	平成12年度	第6回FD部門委員会・授業評価部門委員会	4. 5	平成13年度	第1回FD部門委員会・授業評価部門委員会
9.26	平成12年度	第7回FD部門委員会・授業評価部門委員会	4.18	平成13年度	第2回FD部門委員会・授業評価部門委員会
10.10	平成12年度	第8回FD部門委員会・授業評価部門委員会	5.10	平成13年度	第3回FD部門委員会・授業評価部門委員会
10.24	平成12年度	第9回FD部門委員会・授業評価部門委員会	5.16	平成13年度	第4回FD部門委員会・授業評価部門委員会
11.14	平成12年度	第10回FD部門委員会・授業評価部門委員会	5.30	平成13年度	第5回FD部門委員会・授業評価部門委員会
11.20～12.2	2000年度後期(秋学期)「学生による授業評価アンケート」実施		6.20	平成13年度	第6回FD部門委員会・授業評価部門委員会
11.28	平成12年度	第11回FD部門委員会・授業評価部門委員会	6.25～7.7	2001年度前期(春学期)「学生による授業評価アンケート」実施(予定)	
12.12	平成12年度	第12回FD部門委員会・授業評価部門委員会			

平成13年度 関西大学新任教員オリエンテーションの開催

平成13年4月1日午後1時30分より5時まで、関西大学会館4階大集会室で、平成13年度関西大学新任教員オリエンテーションを開催した。参加者は、30名（新任29名及び現職1名）であった。このような催しが全学的に実施されたのは、今回が初めてである。

その目的は、「新任の専任教育職員が、本学の現状、教育目標、大学教育一般、教育・研究に関わる事項などを共有し、教育・研究活動が円滑に行えるようにすること」である。

河田 全学共通教育推進機構長の挨拶に続いて、以下のプログラムで実施した。

- 1 本学の紹介「教育・研究方針を中心として」：岩見 副学長（教学・総務担当）
- 2 人権問題に関する事項「差別問題」：吉田 人権問題研究室長
- 3 ファカルティ・ディベロップメント
「大学における授業の改革」：水越 FD部門委員長
- 4 法人関連事項の説明
(1) 本学の法人組織と財政：石山 財務局長
(2) 服務・本学諸規程「制度と諸規程」：五藤 人事課長
- 5 研究助成「学内研究費とその他研究費の手続き」：山中 研究助成課長
- 6 教育施設の利用と手続き「図書館及び情報処理センターの利用方法」
(1) 図書館の利用：船越 図書館次長
(2) 情報処理センターの利用：山本 システム管理課長



なお別途各学部・外国語教育研究機構においてもオリエンテーションが実施されている。

掲 示 板

《第1回FDフォーラム》開催！

日 時：平成13年7月4日（水）15:00～16:50
会 場：千里山キャンパス 尚文館（大学院）1F マルチメディアAV大教室
高槻キャンパス 大学院棟（D棟）1F TD106教室（同時中継）

プログラム：シンポジウム『授業評価の現状と今後の課題』

挨拶 河田 悌一（関西大学全学共通教育推進機構長）
第1報告 「佛教大学における授業評価」（約30分）
講師 西之園 晴夫（佛教大学教育学部教授）
第2報告 「関西大学における授業評価」（約20分）
講師 熊野 建（FD部門・授業評価部門委員会委員）
第3報告 「関西大学工学部における授業評価」（約20分）
講師 鈴木 俊光（関西大学工学部教授）
質疑応答 （約30分） コーディネーター 水越 敏行（FD部門・授業評価部門委員長）
司 会 松下 敬一郎（FD部門・授業評価部門委員会委員）

Staff

FD部門・授業評価部門委員長

水越 敏行（総合情報学部）

FD部門・授業評価部門委員

岩崎 憲次（法学部）

畠瀬 直子（文学部）

良永 康平（2000.4.1～9.30・経済学部）

橋本 紀子（2000.10.1～2001.3.31・経済学部）

松下敬一郎（2001.4.1～・経済学部）

鍛冶 邦雄（2000.4.1～2001.3.31・商学部）

長谷川 伸（2001.4.1～・商学部）

常木 暎生（2000.4.1～9.30・社会学部）

熊野 建（2000.10.1～・社会学部）

白岩 正（2000.4.1～2001.3.31・工学部）

栗山 惇（2001.4.1～・工学部）

カイト由利子（2000.4.1～9.30・外国語教育研究機構）

静 哲人（2000.10.1～・外国語教育研究機構）

中塚 義史（2000.4.1～2001.3.31・大学事務局
全学共通教育推進機構事務局）

藤原 有和（2001.4.1～・大学事務局
全学共通教育推進機構事務局）

松川 健志（2001.4.1～・大学事務局
全学共通教育推進機構事務局）